インドネシア大虐殺 2つのクーデターと史上最大級の悲劇

中公新書　2020　倉沢愛子著

序章 「終わらぬ革命」と国際孤立

- 1. インドネシアはオランダの植民地支配終了
- 日本軍の占領を経て、1945年にスカルノによる独立宣言
- オランダの認めない状態が4年以上
- 2. 1949年にオランダがインドネシアへの主権委譲に同意
- 経済的負債や領土問題など新植民地主義の課題
- 3. スカルノは西側でも東側でもない立場　1955年のバンドゥン会議を通じてアジア・アフリカ諸国との連携を強化　国際的な存在感を発揮

- 4. イギリスのマレーシア連邦構想に反発
- マレーシア粉砕闘争を展開、一方アメリカとは共産主義の台頭を巡り関係が悪化
- 5. インドネシア共産党（PKI）はソ連から中国共産党に接近し、武装闘争路線を採用　党員数は急増、軍事力減
- 6. 1965年、PKIの影響力が絶頂　軍との対立、国内の階級闘争が激化
- 親中国路線と毛沢東主義の戦術が、9・30事件へ
- 政治情勢の不安定化

第一章　9･30事件　謎に包まれたクーデター

- 1. 九・三〇事件は、1965年9月30日にスカルノ大統領の親衛隊が七人の陸軍将軍を襲撃、射殺または拉致から開始、犠牲者は計八人に
- 2. 決起部隊は革命評議会、将軍たちが大統領を討伐計画を未然に防止の行動と主張、スハルト少将部隊が反撃、事件はインドネシア共産党（PKI）の仕業
- 3. 事件後、迅速な報道統制、スカルノ大統領の立場は一層厳しい、権力基盤が侵食

- 4. スカルノ次第に勢い衰退、権力を消失
- 5. 日本政府は当初、次第にスハルトの影響力が増、権力の中心が移行を確信
- 6. 第三夫人デヴィの証言、スカルノはナスティオンを敵対視、PKI非難を拒否の続行でナスティオンとの関係は険悪となり、スカルノの演説の影響力は次第に衰退

第二章　大虐殺ー—共産主義の一掃

- 1. スハルト政権下で国軍や官僚機構内で徹底的な思想や家族関係のスクリーニング
- 、九・三〇事件関係者や間接的関与者も含めて粛清や追放が広く社会に浸透
- 2. スクリーニングは国軍主流派が勢力を固めるため
- 職員のスクリーニング基準は曖昧で主観的、処分は政治的立ち位置によって変化

- 3. 国際社会の反応は限定的、ソ連や中国を含む社会主義国は国益を優先、インドネシアにおける共産党員の迫害に対して強い抗議行動
- 4. 国連ではインドネシアの大量虐殺問題が取り上げられたが、具体的な行動には至らず、国際社会の対応は全体として消極的
- 5. 教化プログラムが導入され、スカルノ主義を保持しつつ革命精神の育成が図られたが、国際社会からの大きな変化をもたらすことはなかった。

第3章　3・11改変

- 1. 1966年3月11日、スカルノがスハルトに治安回復の権限を移譲、スハルト派の無血クーデターが成功、スカルノは大統領の地位を失効
- 2. スカルノ権威の喪失背景には反スカルノデモの激化と経済混乱があり、スハルトは全権を掌握しスカルノ派大臣を逮捕
- 3. スハルト政権下でインドネシアは国際的孤立から脱退、マレーシアとの関係修復、ASEAN設立に貢献

- 4. アメリカのベトナム戦争への関与と共産主義勢力の消滅が東西対立のパワーバランスに影響、インドネシアは国際連合に復帰、外交政策を再活発化
- 5. スハルト政権は非同盟中立路線を維持し、中国や北朝鮮との関係を保持、東南アジアの政治的結束を強化、中国の国連加盟に重要な役割

第4章　敗者のその後

- 1. 1968年、スハルトがインドネシア第二代大統領に就任、「オルデ・バル」体制を確立、国内政治を「ゴルカル化」して安定を画策
- 2. スハルト政権は中国系住民を抑圧、中央集権的な独裁体制をパンチャシラに基づき、共産主義者やその家族に対する弾圧。

- 3. 弾圧を逃れた逃亡者や亡命者たちは社会主義国や西ヨーロッパに移住、絶望感やストレスを抱え、生活

- 4. 文化大革命の終息後、中国はインドネシア人亡命者を第三国への移住を許可、彼らは最終的に西ヨーロッパに移住
- 5. スハルト時代の政策はインドネシア社会に深い傷跡
- 多くの人々に困難な選択を強制

終章　これから

- 1998年にスハルト体制が終了、後継の大統領たちは政治改革を試行
- 1965年の事件に関する名誉回復や和解の進展は限定的
- 歴史の改編も一時的で、事件は徐々に風化
- 犠牲者の権利回復や政府の謝罪訴求の動きは、実質的な進歩は遅い状態